

高温・少雨に対する農作物の技術対策

平成30年7月2日
農業技術課

1 気象状況

関東甲信越地方では、6月6日に梅雨入りし、6月29日に梅雨明けしたと気象台から発表されました。梅雨期の降水量は67.5mmと、ここ数年の梅雨期間中の降水量と比べ、非常に少ない状況で推移しています。

週間天気予報では、降雨が予想されていますが、ここ数日は、連日30以上の高温で経過しており、今後も高温が続く予報となっていることから、高温と少雨による農作物への影響が心配されます。今後の気象推移に注意し、管理を徹底して下さい。

	梅雨期間	降水量(甲府)
平成30年	6月6日～6月29日	67.5mm
昨年(29年)	6月7日～7月6日	129mm
一昨年(28年)	6月5日～7月29日	142mm

観測値：甲府地方気象台

甲府地方気象台 7月2日11時 発表 山梨県の週間予定表

7月2日11時 山梨県の週間天気予報

日付	3 火	4 水	5 木	6 金	7 土	8 日	9 月	
山梨県 府県天気予報へ	晴のち曇 	雨時々止む 	曇時々雨 	雨 	曇時々雨 	曇一時雨 	曇一時雨 	
降水確率(%)	0/0/10/20	90	70	90	90	50	50	
信頼度	/	/	C	B	B	C	C	
甲府	最高(°C)	33	29 (26~31)	27 (26~34)	26 (24~32)	27 (25~33)	30 (27~34)	33 (28~36)
	最低(°C)	22	23 (21~24)	23 (21~25)	22 (21~25)	22 (21~24)	23 (21~24)	23 (21~25)
平年値	降水量の合計		最高最低気温					
甲府	平年並 13 - 34mm		最低気温		最高気温			
			20.9 °C		29.6 °C			

2 技術対策

(1) 果樹

1) 共通事項

・乾燥防止対策として、土壤の乾燥具合を確認し、乾燥している場合には、定期的な灌水に努める。(成熟期の園では約5日間隔で20mm、果実肥大期の園では4～5日間隔で30mm、収穫後の園(施設栽培を含む)では約7日間隔で30mmを目安とする)

但し、収穫前の園では一度に多量の灌水は、果実品質の低下を招くので避けるとともに、収穫5～7日前で灌水は控える。

・樹冠下は敷ワラ、敷草を実施するとともに、草生栽培園では草刈を励行する。

- ・灌水施設等のない園は、樹冠下を中心に1樹当たり200～300リットル灌水する。
- ・アザミウマ類やハダニ類の発生が多くなることが懸念されるため、定期的な防除を徹底する。特に、ハダニ類の発生が見られる園では早急に防除する。なお、多発してからでは防除効果が劣るため、初期防除を徹底する。

2)モモ

- ・着色期の過度な葉摘みや新梢(徒長枝)の剪除は避ける。
- ・反射マルチを敷く前に灌水を行う。
- ・反射光の強いマルチは、日焼け果などが起きやすいので、白色マルチを使用するか、反射マルチを敷く量や反射程度(古いマルチや裏面使用)を調節する。着色が進み次第早めに反射マルチを除去する。
- ・下垂枝への支柱やつり上げにより、反射マルチとの距離を確保する。
- ・日持ち性向上のため、収穫は気温の低い朝に行う。
- ・果実硬度2～2.5kgを目安に適熟収穫に努める。なお、最高気温が35℃前後になると、着色が遅延する傾向があるため、熟度に注意して収穫を行う。

3)ブドウ

- ・着色始めに果房が高温とならないように、過度な新梢の切除や摘葉を控え、必要以上に棚面を明るくしない。
- ・高温が続く場合は着色不良になりやすいので、早めの除袋を行うが、果房に直射が当たる場合は、クラフト紙のカサかけや誘引の見直しを徹底する。
- ・結果過多園や樹勢低下樹では、早めに見直し摘房を行い、着色向上に努める。なお、玉張りが平年より良好な園では、結果過多とならないように注意する。
- ・新梢伸長が続いている樹は、ベレーゾン期前か、着色が全体に回った時期に、新梢先端の摘心と副梢を2～3枚残して摘心し、着色向上と養水分の競合を防止する。

4)スモモ

- ・収穫期に高温が続く場合、過熟果の発生が心配されるので、着色にとらわれず、果実の弾力と熟度を優先した収穫に努める。

5)オウトウ

- ・花芽分化期以降の高温、乾燥は翌年の双子果の発生原因となるため、定期的な灌水と敷ワラ等により土壌乾燥を防止する。
- ・ハダニ類の発生に注意し、収穫後も定期的な防除に努める。

(2)野菜

- ・健全な生育を促すため、定期的に灌水する。
- ・地温の上昇と水分の蒸散を抑えるため、敷きワラや敷き草を行う。
- ・果菜類では、着果負担を軽減し草勢を維持するため、不良果(奇形・変形果等)は早めに摘果し、健全果(良果)は肥大し過ぎないように収穫を適期に行う。
- ・草勢が極端に落ちている場合には、草勢の回復を図るため、必要に応じて液肥の葉面散布を行う。
- ・アザミウマ類、ハダニ類、オオタバコガなどの害虫による被害が増加することが懸念されるため、ほ場での発生に注意し、発生初期の防除に努める。
- ・夏秋なすでは、つやなし果の発生を防止するため、整枝、摘葉などを徹底し、葉面からの蒸散量を抑える。うね間灌水をする場合は、地温が下がる夕方に行い、株元まで水位を上げないように注意する。
- ・夏秋トマトでは、ホルモン処理を徹底し、着果促進を図る。また、カルシウム剤の葉面散布を行い、尻腐れ果の発生を予防する。

(3)花き

1)共通事項

- ・アザミウマ類、ハダニ類などの害虫による被害が増加することが懸念されるため、発生状況を把握し、初期防除に努める。

2) 施設花き

- ・寒冷紗などで、強めの遮光をするとともに、強制換気に努め、葉面温度の上昇を防止する。
- ・朝夕に灌水を行う。

3) 露地花き

- ・敷きワラ、敷き草を行い、朝夕に灌水を行う。

(4) 水 稲

今後、穂肥の施用時期を迎えるが、栄養不足になると胴割れ粒の発生を助長するので、葉色を見ながら適期に施用する。

(5) 茶

敷草を行い乾燥防止を図るとともに、定期的な灌水に努め樹勢の維持を図る。

(6) 畜産

共通事項

- ・良質で消化率の高い飼料の給与、ビタミンやミネラルの追給求及び清浄で冷たい水の給与に努める。
- ・高温時は飼料や水が劣化しやすいので、残渣等を放置しないよう努める。
- ・観察の頻度を増加させることにより、健康悪化の兆候がないか等、家畜の健康状態をよく把握し快適性に配慮した飼養管理に努める。

舎飼い家畜(牛・豚・鶏等)

- ・飼育密度の緩和、換気扇や扇風機等による送風や散水・散霧を行い、家畜の体感温度の低下に努める。
- ・寒冷紗やよしずによる日除け、屋根裏・壁・床への断熱材の設置及び屋根への消石灰の塗布等により畜舎環境の改善に努める。

放牧家畜(主に牛)

- ・放牧する時は、朝・夕などの涼しい時間帯での実施や、日陰林等のある放牧地での実施に努める。

熱中症対策

暑熱環境下での作業は、熱中症(熱射病、熱けいれん、熱まひ)を生じる恐れがあるので、次の事項に注意する。

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行う。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給する。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に気を付ける。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をする。
- 作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努める。
- 屋内では遮光や断熱材の施工等により、作業施設内の温度が著しく上がらないようにするとともに、風通しをよくし、室内の換気に努める。
- 作業施設内に熱源がある場合には、熱源と作業者との間隔を空けるか、断熱材で隔離し加熱された空気は屋外に排気する。